

双子

「長い間すみませんでした、もう大丈夫です」

美佳子は少し落ち着いたので仕事復帰する事にした。完全に落ち着いたわけでは無いが、仕事している時が気を紛らわす事が出来ると思ったのだ。

「もう大丈夫なのか？余り無理するなよ」

私がショックで休んでいる間でも、川本編集長は私にメールなどをくれ、元気づけてくれた。仕事復帰したのは、もしかしたら編集長の顔を見たかったからかも知れない。

「今回のあの事件、うちでも特集を書く事にした。それで今回はお前が一番だと思っている。」

「私ですか？」

「そうだ。お前が体験した気持ちを書けば良い。色々知りたい事もあるだろう？」

「はい、お願いします」

<怪奇事件>

翔子が何故死んだのか？それを知りたかった。他の出版社では翔子の事を'精神不安定によるもの'と書いているが

私はそうじゃないと思っている。翔子はそんな子じゃないという事は私は知っているのだ。

「では、早速取材に行ってきます」

「うん、頑張ってください」

私は翔子が通っていた精神病院へと向かった。精神病院へと通っているのは知っていたがどこの精神病院へ通っていたのかは、翔子のお母さんへ電話したら教えてくれた。今回の事件が私が書くことになりましたと伝えると、お願いします。と言っただけ言ってその後は何も無かった。翔子の為にも真実を書きたいと想う気持ちでいっぱいである。

精神病院へ行き、ドアを開けるとロビーがあった。

「すみません、私翔子さんとはお友達で田中美佳子と申します。翔子さんのお母さんからこの病院に通っていたと聞き、先生のお話をお聞きしたいのですが」

「すみません、そういった事はプライバシーの問題でお答えする事は出来ないんです」

「私、翔子が精神不安定で死んだなんて思ってないんです、そこを何とかお願いします。」

「困ったわぁ・・・先生に聞いてみます」

無理なのは解っている。でも、私は真実が知りたいだけなのだ。

待つ事10分。ロビーの人が戻ってきた。

「左の奥へと進んでください。そうすると待合室があるので'待合室2'で待っていてください」

「ありがとうございます」

奥へと進んでいき待合室で待つことに。しかし、許可が出るとは思っていなかった。ほとんどの場合は門前払いである。嬉しい反面、何故という疑問ばかりである。しばらく待っているとガチャと扉が開き先生がいらっしまった。

「すみません、お待たせしました」

見た目は私と同じくらい若く思える。もっと年いった人が出てくるのだと思っていた。

「私が翔子さんの担当だった長崎智也と申します。」

「すみません、いきなり・・・」

「いえいえ、ええっと美佳子さんだったかな？」

「はい、田中美佳子といます。翔子さんとは友達だったんですが、あんな事件になってしま・・・」

事件という言葉を出すと先生が顔を曇らせた

「僕も凄く残念だよ。まさかあんな事になるなんてね」

「私もです、それで世間では精神不安定で死んだなんて言ってるけど私はそうじゃないと思っ
ているんです」

「それは何故かな？」

「それは翔子とは学生の頃からの友達で彼女はそんな事で死ぬような子じゃないと知っているか
らです」

「そうかそうか。君の話はよく翔子さんから聞いていたよ」

「え？翔子が私の話を？」

「うん、君の話をする翔子さんはとても楽しそうだった。学生の頃の話。会社に入ってからの話
。色々聞いたよ。美佳子さんという方が来ていますと聞いた時は翔子さんの話に出てくる美佳子
さんだとすぐ解ったよ」

「そうですか、翔子がそんな事を」

「今日はどうされましたか？」

「今日は、翔子がどんな様な様子だったのか知りたくて」

「様子かあ・・・」

先生は少し考えてから話始めた。

「確かに、精神不安定だったよ。でも、他の人とは少し違う」

「他の人とは違う？」

「そう、凄く怯えた様子だった。私は最初は幻聴や幻覚によるものかなと思ったんだがあの怯え
ようは違ったね」

何かに怯えるよう。。。その時、手紙を思い出した。'あの子達'という文章だ

「先生、翔子が'あの子達'か何か言ってませんでした？」

先生がまた顔を曇らせた、先生が少し考えた後、口を開いて私に質問をした

「君、霊って信じるかい？」

「霊ですか？私は信じていません」

「僕もだよ、霊というものを信じなかったんだが、彼女の話聞いてると見えるんだって」

「霊が？」

「そう霊が。しかも二人」

翔子が霊を見れる？そんな事を翔子からでも聞いた事がない。あの手紙にあった'あの子達'という
のは霊なのだろうか？

「翔子さんの話によると、白い服を着た双子の少女らしい。その双子が毎晩'遊んで'と言ってくる
んだって。って遊んであげないと怖い事になるから遊んであげるんだって。すると満足して帰っ

てくれるらしい」

「僕も最初聞いた時は信じて無かったんだよ。しかし、日に日に翔子さんが怯えるようになってね。この怯えようは何か違うと思っていたらあの事件だよ」

先生の話聞いて私は何も言えなかった。霊？翔子が死んだのは霊だと言うの？真実を見つけると思ったけどいきなり壁にぶち当たってしまった。

「翔子は他にどのような事を？」

「他には特に何も。病院に来ては同じ事を話していたね」

「そうですか……」

どうも、ありがとうございました。と挨拶して外に出てみるも頭の中がパニックになっていて何も考える事が出来なかった。

「双子の幽霊……」そんな事を考えながら会社に戻る事にした
会社に戻る中、先生と話した事を、まとめる事にした。

会社に戻ると編集長の所に向い私は先生と話したことを伝えた。

「それは難しいなあ……」

「と言いますと？」

「霊などの記事をのせてみる？世間の目は冷たくなる。それに翔子のお母さんだって辛いだけだぞ」

「そうですよね」

「そうだな、今回の記事はお前だけではダメだ。俺も一緒に付いて行ってやろう」

「編集長がですか？」

「お前だけでは書けないという事だよ」

「今日はもう帰ってゆっくり休め」

そう言うと編集長はサッサと仕事を始めてしまった。

家へ帰ると何だかドツと疲れが出てきた。まさか‘霊’という話になるとは思っていなかったからだ。翔子もそんなのを信じるような子では無かった。それなのに何故……。

整理しているともう夜中の1時を過ぎていた。明日も仕事だから寝るか。そう思い美佳子はベッドの中へと入って眠る事にした。しかし、その夜は何だか不思議な夢を見た。

その夢とは古い民家で自分が見たこともないような民家だ。玄関を入ると目の前には部屋があり、左には階段がある。左へ曲がり奥へと進むとキッチンがあり女の子の人が料理をしている。テーブルには男の人が座っており動かない。

「これは夢なのか？」と美佳子は思った。あまりにも鮮明すぎる夢なので自分自身がそこに立っているかのような気持ちだったのだ。

ダダダダ

奥から女の子が走ってくる。今から食事だろうか？そう考えていたら女の子が私の腕を掴んできた

私はビックリして女の子の方を見ると女の子はこっちを見て

「お姉さん、遊んでよ」

ガバっと私は起きた。丁度朝の6時になる所だった。夢？・・・夢なのに鮮明に覚えている。あれは何だったんだろうか・・・それにあの女の子の声。翔子の部屋に行った時に聞いた事と同じだった。どういう事だろう？

そんな事を考えながらお起ようとした瞬間

「痛！」

何だか左手に痛みが走った。袖をまくりあげて見ると痣が出来ている。

「どこでぶつけたんだろう・・・」

と考える美佳子の周りですでに変化が起き始めていた。